NEWS LETTER
vol. 51
June 30, 2018
GRADUATE SCHOOL OF PUBLIC POLICY, THE UNIVERSITY OF TOKYO
東京大学公共政策大学院
GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO

Contents

1ページ　院長就任ご挨拶（高原明生）
2ページ　新施設紹介（学生ラウンジ、自習室、ディスカッションスペース）/ GraSPPオリンピック2018（後藤啓人さん）
3ページ　学生インタビュー第27回（藤田香澄さん）
4ページ　退任にあたって（飯塚敏晃）/ TOPICS

院長メッセージ

東京大学公共政策大学院院長　**高原明生**

冷戦終了からほぼ30年が経った今日、私たちは再び世界史の新たな局面に突入した感があります。グローバル化や地域統合を否定し、逆転させるような動きや、大国による国際法の無視と実力による現状変更が起きています。日本では少子高齢化と東京への一極集中が進んで「地方消滅」が警告される中で、安全保障環境の悪化への対応が問われています。こうした状況下で、通信技術や人工知能が飛躍的な発展を遂げ、生活を便利にするとともに情報統制をも容易にしています。私たちはかつて経験したことのない、多くの挑戦に直面しているのです。

2004年4月の設立以来、GraSPPは法学、政治学、経済学をバランスよく学ぶ学際的な教育と、国際機関や官公庁出身の実務家教員による実践的な教育を実施し、広く公共政策に携わる政策プロフェッショナルの養成に努めて参りました。今日、私たちの役割は益々大きくなっていると考えます。

GraSPPの第一の特徴は国際化の積極的な推進です。2010年度からは英語のみで修士号が取れる国際プログラム（MPP/IP）を設置しましたが、それに参加する日本人学生も増えています。今や日本人と外国人の比率はほぼ半々で、授業の約45%を英語で提供しています。かつ留学機会は豊富で、コロンビア大学、パリ政治学院、LSEなどを始めとする世界トップクラスの大学13校と学生交流協定を結んでいますが、その内8校とは、東京大学と留学先の両方の学位が取れるダブル・ディグリー制を実施しています。その他にも国際経験を積むチャンスは多く、私が学生だったら是非参加したいと思うのは、北京大学国際関係学院、ソウル大学校国際大学院とダブル・ディグリーやジョイントコースを実施しているCAMPUS Asiaプログラムです。

こうした様々なプログラムのおかげで、約30の国々から学生が来ています。その多くはアジア各国の中央銀行や財務省、外務省などの官庁、マスメディア、法曹界、金融機関などでの勤務経験者で、留学生には英語環境でのインターンの機会を紹介しています。GraSPP修了生は既に1200人を超え、その出身国の数は約50に及んでいますが、これからは修了生とのネットワーキングを一層強化して参ります。

2016年度からは博士後期課程を開始しました。政策の立案、評価、実施に必要な知識やスキルが高度化、複雑化している現在、特に国際機関や国際交渉の場においては博士号が必須の時代を迎えつつあります。専攻における高度な研究能力に加え、学際的な能力と実務能力を兼備し、国際金融・開発及び国際安全保障の分野において世界の公共政策をリードする人材を養成することが狙いです。

GraSPPのもう一つの特徴は、様々な外部資金等を導入し、実務と最先端の研究教育との連携を図ってきたことです。現在は、科学技術イノベーション、海洋、人材政策、医療政策、エネルギー・環境、資本市場等の分野で研究プロジェクトを設け、研究の成果を社会に広く還元しています。また、現実と結びつく実践型の研究教育の一環として、全学の部局横断型プログラムで主動的な役割を果たしています。さらには、費用対効果評価の制度化に向けて国内の人材不足が問題となっている中で、2017年度から医療技術評価のエグゼクティブプログラム（社会人講座）を始めました。

2017年には国際学術総合研究棟が竣工し、研究、修学環境が抜本的に改善されました。学生諸君は恵まれた条件を活かし、一流の政策のプロを目指して自分を鍛えてほしいと思います。各界の皆様には引き続きのご支援とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

学生ラウンジと自習室、ディスカッションスペースができました！

今春に学生ラウンジと自習室、ディスカッションスペース（5部屋）が国際学術総合研究棟4階に完成しました。
学生ラウンジは明るい色使いのインテリアで整えられ、居心地の良い雰囲気です。自習スペースは広々とした解放感のあるワンフロアにあり、席数も以前の約2倍に増えてゆったり。また、部屋の両端の大きな窓からは光も入り、明るい雰囲気になりました。5部屋あるディスカッションスペースは床の色がすべて違います。その日の気分によって部屋を選べば、モチベーションも上がって、活発な議論が行われるかも。ぜひ積極的にご利用ください！

GraSPPオリンピック2018開催

MPP/IP 2年　後藤啓人

GraSPP学生自治会が昨年から始めた新入生歓迎行事「GraSPPオリンピック」が今年も4月4日に開催されました。当日は朝から本郷キャンパスの御殿下記念館には、昨年9月と今年4月に入学した新1年生約80名が参加集まりました。競技は昨年同様に綱引き、玉入れ、大縄跳びの3種目。まさか大学院に入学してまで小学校の運動会でやる競技をするなんて予想外、という表情の参加者たち。日本人学生は、留学生に競技を説明するために「言葉の壁」をまずはよじ登らなければなりませんでした。
第1種目の綱引きで試されたのはチームワーク。急ごしらえの各チームに与えられた試合時間は30秒。実際に競技を開催してみると、わずか数秒で各チームの勝敗が決しました。
第2種目の玉入れで求められたのは戦略。昨年とは趣向を変えて、各チームから選ばれた1名がバスケットゴールの真下で籠を抱え、残りのメンバーが数メートル離れたセンターラインから玉を投げ入れるというスタイルにしました。試合時間は5分。タイミングを合わせて玉を投げればいいものの、得点を稼ごうと焦る気持ちから、籠を抱える選手には戦場を飛び交う砲弾のごとく、力のこもった玉が一斉に雨あられのように降り注ぎました。小学校の子供たちが投げる玉ならまだしも、20歳すぎの大人たちが投げる玉を、籠を抱えた選手は顔面や体に被弾しながら、なんとか籠に入れようと奮闘していました。最終種目の大縄跳びで求められたのは阿吽の呼吸。初めて顔を合わせた面々が息を合わせて一斉に飛ぶのは至難の業。試合時間の5分間に、20回以上連続で飛んだチームもありましたが、昨年の記録を更新するに至りませんでした。
大いに盛り上がった一方、試合中に怪我をした学生が2名おり、事故防止に向けた改善など、来年への課題も出た今回のオリンピックとなりました。ハプニングがあったものの、汗を一緒に流して、チーム一丸となって戦った日本人学生と留学生の間に生まれた絆は、まさに"スポーツに国境はない"を物語っていました。
そんな彼らは午後から実施されたポリシーチャレンジでさらに絆を深めたことでしょう。

学生インタビュー 第27回

PEC Voices of Future 2017(APEC ユース会議)にて。右から2番目が藤田さん

藤田　香澄さん
（国際公共政策コース2年）

—大学院から東大に入学してから、学生生活はどうですか？

すごく楽しく、充実しています。1年生の時に学生自治会に入ったんですけど、GraSPPは学生間の交流や外部講師の方も多いですし、いろんな人と出会って、やりたいことが一気に増えました。大学の時は体育会系のバレーボール部に所属していて授業とバレーボール漬けの4年間だったので、大学デビューって感じです(笑)

去年はGraSPPが紹介してくださるプログラムをフル活用しました。最初に参加したのはLKY Japan Study Trip(ジャパンスタディトリップ)というプログラムで、リー・クアン・ユー公共政策大学院(LKY)の学生30名が日本に来て、彼らと一緒に日本を巡る研修旅行でした。私は入学前でしたが、幸運にも参加させてもらったんですが、それまで同じ年代の人としか話したことがなかったので、様々な経歴の方の話を聞いて衝撃を受けて、突然世界が広がりました。あとは11月にはベトナムで行われたAPECのユース会議にも参加しました。APEC会議の前々日に各国のユース(学生)が会議をするんですが、事前準備もして、各国代表が持ち寄った意見を現地で提案書にまとめる作業はとても刺激的だったし、実際のAPECの各国首脳による講演を見られたのも貴重な経験でした。

去年やったことの中でも特に印象深いのは、去年から東大で始まったフィールドスタディ型政策協働プログラムで行った青森です。4回ほど十和田に現地調査に行って以来、すっかり青森にハマってしまって。

—なぜ青森、十和田を現地調査先に決めたんですか？

プログラムで担当地域を決める時に参加県庁の方のプレゼンテーションを聞いたんですが、青森県庁の十和田担当の方がすごくパワフルで、彼の話に引き込まれて決めました。十和田担当の方はフットワークが軽く、地元に顔が広かったので、現地で色々な方をご紹介いただき、町の方々も温かく迎えてくださったのが嬉しかったです。あと、十和田のフィールドワークがきっかけで、B級グルメの「十和田バラ焼き」でまちおこしをしているバラ焼きゼミナールの畑中さんに知り合ったのも、ハマった理由の一つです。2014年のB級グルメグランプリで優勝した時や被災地支援の様子をまとめた映像を見て、真剣に地域振興に取り組まれている姿に刺激を受けました。あと、ちょうど去年は日中国交正常化45周年ということで、10月に中国の瀋陽(シンヨウ)で日本から10数団体が参加したB級グルメの祭典が行われたんです。バラゼミが地元の中学生たちを連れて瀋陽の祭典に行くというので、中学生8人のお世話役として私も同行させていただいたんですが、初めて中国に行ったこともあって、とてもいい経験でした。去年は県庁の方や畑中さんなど、今後もつながっていきたいと思う人たちとの出会いがたくさんあったので、これはこれからも大事にしていきたいです。

(インタビュー・文責　編集担当)

日本にいるツバル人留学生と。
幼少期をツバル、キリバス、フィジーで過ごした

退任にあたって

飯塚　敏晃

2年間の任期を終え、2018年3月末で公共政策大学院長を退任いたしました。在任中は多くの皆様にご支援いただき、無事任期を全うすることができました。心より御礼申し上げます。

公共政策大学院は2004年に設立された新しい部局ですが、この2年間に大きな節目を迎えました。第一に、2016年4月に博士課程を開設しました。政策実務の高度化・国際化に対応し設立したもので、国際金融・開発と国際安全保障を主たる研究領域としています。従来の研究中心の博士課程と異なり、博士号取得後は政策実務に携わる人材の養成を主眼としています。修士課程の修了生の中からも、博士課程へ応募する方が表れてきています。また、博士課程の開始にあたり、外国人2名の教員を採用し構成員の多様化を進めましたが、併せて教授会を英語開催するなど内なる国際化にも取り組んできました。

第二に、公共政策大学院設立以来、長年待ちに待った、「悲願」、の新棟が2017年8月に竣工しました。これまで本郷キャンパスに点在していた、教員室、職員室、教室、院生室の多くが新棟に集約され、ようやく学生や教職員が、自らの「居場所」、と感じられる場ができたことを心よりうれしく思います。また2018年4月には、スタディルーム、ラウンジ、ディスカッションルームを備えた公共政策大学院専用の学生フロアが、赤門総合研究棟4階に新装オープンします。こちらも長年学生の皆さんから強い要望があったもので、ようやく実現することができ、感無量です。これらの新たな施設を通じ、公共政策大学院に集う多様な学生の交流が大きく進むことを切に願っています。

これらに加えて、修了生や在学生の交流を促進するための取り組みに力を入れてきました。修了生と在学生が一堂に会する場として、GraSPP Alumni & Student Dayを開催し、2017年10月には、海外から参加した修了生約40名を含め、170名もの参加がありました。旧知の友人や教職員との再会に加え、新たな出会いやネットワークが生まれました。毎年東京大学のホームカミングデーに合わせて実施しますので、修了生の皆さんは、是非一度、新しい校舎や学生フロアを見に母校を訪ねてください。また、日本人学生と外国人学生との交流を進めるため、オリエンテーションを拡充したり、多国籍の学生が共同作業を通じて政策提言を競う、GraSPP Policy Challengeを開催したりしています。

設立から14年を経て、公共政策大学院は新たなフェーズに入りました。世界に冠たる公共政策大学院に向けて、更に歩みを進めて参りますので、引き続き皆様の温かいご支援を賜りますようお願いいたします。

TOPICS

3月22日、2017年度公共政策学教育部学位記伝達式が国際学術総合研究棟SMBC Academia Hallにて挙行され、修了生75名に学位が授与されました。修了生のご親族、本教育部教職員が列席する中、飯塚敏晃教育部長から、修了生一人一人に学位記が伝達されました。また式典では、成績特別優秀者1名及び成績優秀者3名の表彰が行われました。

編集後記

待望の国際学術総合棟（通称・新棟）が完成し、この春からは高原新院長を迎えて、新たなスタートを切ったGraSPP。なにかと変化の多い時期ですが、実はニュースレターも今号から新しい編集担当者が制作することとなりました。長く築かれてきたニュースレターの歴史を引き継ぎ、今後も益々GraSPPの魅力を広く発信してまいります。（編集担当）

vol. 51 NEWS LETTER

〔編集・発行〕東京大学公共政策大学院　〔発行日〕2018年6月30日

113-0033　東京都文京区本郷7-3-1
E-mail　grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp
http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/